

その日、主人は途中迄見送ってくれました。残る山道の一人歩きを心配しながら山に帰って行きました。

そのころ、神奈川新聞に「わが愛妻物語り」が連載され私達夫婦の生活も取材されました。

丹沢の牽牛織女だとはやされました。こんな生活からか世にいう倦怠期とかも味あわずに済みました。

裸の人生になり裸からのやり直し、私達の選んだ道はこれでよかったですと思っております。

苦難の中に仕事の基礎ができて今日に至っております。

引揚体験記

神奈川県 今井 健 二

明治三十六年、祖父は海外雄飛を志し、朝鮮に渡り仁川の加来商店に入り、将来独立を目ざしていた。

父は結婚後、長男と次男の私だったが、商売の方は朝鮮の農家の副業産物である藁工品の買いつけと、販

売を開始した。日本向け輸出用を一手に引受け、商売の基盤はしだいに固まり、藁工品のあきないは道内全体に手広く進めるにいたった。

又、仁川では一応知名の士のうちに入り、商工会議所の副会頭をしていた。

私は京城帝国大学法学科を卒業後、朝鮮銀行京城本店に就職、昭和十六年北京支店勤務となり、その後、大東亞戦争に突入した。十八年二月結婚し北京において家庭をもった。

十九年二月、現地召集になったので妊娠三か月の妻を北鮮咸興の実家に帰して生活させた。

私は山西省の旅団に入営したが終戦で召集解除となり、中国よりの引揚げ第一船に組み入れられた。

終戦直後は中国と朝鮮は南北共に全然連絡はとれず、実家が何処に引揚げるかもわからず、北鮮の妻と実家はどうなっているかもわからず、特に北鮮はソ連が侵入してきたと云うので一層不安はつのるばかりである。

私は中国よりの引揚げ第一船に乗船が決まっていた

ものの、どこに引揚げるとはわからず乗船し、佐世保に上陸した。

さしあたり、大阪の郊外に実家のある、銀行の同僚の家に一応世話になることにして、帰国の第一歩とした。

大阪市天王寺区に妻の従兄の家があることを知っていたが、天王寺方面は空襲で、激しくやられているのではないかと、行ってみたところ、危うく被害をまぬがれていて、ここにお世話になることを心よく了承していただいた。

情報によれば父と母は下関の叔母の家に引揚げていることがわかり、とるものもとりあえず私は下関に早速行き、数年ぶりに家族全員との再会を果たした。

父は朝鮮の威興で入院中のところ引揚げたものであり、精神的疲労と将来に対する不安と絶望的な状況にあった。母は長年の看病づかれと精神的な打撃で、同様に疲労困ぱいの極に達していた。しかし私の引揚げてきた姿を見て父母の喜びは涙のみであった。

三か月後、母は急死した。母に続いて一か月後に父

も後を追うように死亡してしまった。

母と父の葬儀を終えて間もなく、私の寄留先に、妻の実家に勤めていた朝鮮人より、妻と実家の全員が北鮮より闇船で南鮮に脱出し、六月頃引揚げできるとの葉書が到着した。

六月の中旬、妻の両親、弟、及び妻と長男の眞が引揚げてきたので涙の再会を果たした。三歳の長男とは初対面となった。

妻一家の北鮮における状況は、父が居住地威興において、日本人会長をやっていた関係で、ソ連兵侵入後、監獄におちこまれ、妻は長男を抱きかかえて逃げまわり、親戚に身を寄せ、母は間もなく心臓麻痺で急死した。

とにかく、一日も早く生計の道を立てねばならず、天王寺の親戚の関係している会社に就職し、生活の目はたつた。その会社に十年余勤務して銀行時代の先輩のあっせんで、外務省関係の移住事業団に入り、東京に進出し、公団の住宅に入居できて親子四人初めて独立した生活をする事ができた。

朝鮮銀行は海外銀行であったため解散したので、私は東京方面へ早く進出しておればもっと道は開けていたと思われる。

しかし、移住関係の仕事でブラジルで六年勤務し、定年退職後、現在の中小企業に勤務して、早十年余を経過している。

引揚げて

兵庫県 小林 秀 治

日中戦争が拡大し、世界情勢が大きく変っていく中で、満蒙開拓を夢見た私は、いろいろと手をつくしました。結果が朝鮮・平安北道から公立新義州高等女学校の教諭として採用通知を受け、赴任したのです。現地の気温は零下が平均気温で、家庭ではオンドル生活で、食事は内地（日本）と別に変らないのですが、特色ある朝鮮料理やキムチなど、珍しいものばかりです。学校は日本人のみの高等女学校で、四年制、定員は一

クラス五十人、うち一割は朝鮮人を就学させるという規定ですが、教職員、生徒とも皆日本人ばかりでした。スポーツはスケートとバレーボールくらいです。朝鮮半島の三寒四温の気候帯を珍しく感じましたが、原因は水豊発電所のダム建設のために水温が上がリ、鴨緑江の川水も高温となって凍結しなくなったからとのことでした。食糧不足が見えてきた昭和二十年三月末、全羅南道光州府公立光州高等女学校への転勤がまきり、四月五日に着任しました。ここでも勉強はほとんどなく勤勞奉仕のみでした。二十年八月、世界大戦は終結しました。わが軍は敗北し、広島、長崎には原子爆弾が投下され、東京をはじめその他の都市にも空爆による多数の死傷者を出したことは永久に忘れることはできません。

三十有余年におよぶ日本政府の压制下におかれていた朝鮮半島の人びとは、天下晴れての万歳、万歳の連続です。われわれ日本人は本国（内地）への帰還のために、荷物の片づけをして引き揚げのニュースを待つばかりでした。そのころ私は二度目の召集を受け、入